

東 賢太朗著、『リアリティと他者性の人類学——現代フィリピン地方都市における呪術のフィールドから——』、三元社、2011年、374頁、5250円＋税

杉井 信

本書は、中部フィリピンのパナイ島カピス州における妖術師、カリスマ刷新運動、呪医についての実地調査にもとづき、メイン・タイトルにある二つの語、「リアリティ」と「他者性」をキーワードとする、呪術の理論的考察を行った人類学的研究である。

本書は民族誌と銘打った作品ではない。だが、調査地での儀礼、信仰、妖術、伝統医療についての概説文や民族誌データが十分に挙げられていることや、著者が調査地で直面した困難や戸惑いと直接関わる議論が本書の柱になっていること、その感覚を読者に伝えたいとの工夫が感じられること、民族誌記述の問題についても著者は自覚していることから、十分に民族誌とみなすことができる。フィリピン研究（社会人類学）学徒である評者は本書を民族誌として読ませてもらった。まず述べておきたいのは、民族誌としての本書の内容は評者にとって興味深く、かつ読んで得るところが大きかったということである。ただその際に、いくつか気付いたこと、気になったこともある。以下、本書の内容を紹介しつつ、適宜それらのコメントを加えてゆく。

全体の構成は、序論と結論の間に、それぞれ4章ずつからなる第1～3部が組み込まれている、という形になっている。

序論ではまず、「はじめに」において、調査地での著者の個人的な呪術体験がエピソードの形で示される。その上で、呪術のリアリティと他者性という本書の中心的な問題、すなわち、調査地の人々のみならず、時には外来の調査者である著者にとっても、その呪術がリアリティを持つのはなぜか、またそのようなリアリティを持つにもかかわらず、遠く隔てられた他者の領域にあるものとして呪術が疎外されているのはなぜか、という問いが立てられる。続く第1章では、まず、呪術の先行研究が紹介される。既存のどの研究アプローチにおいても、合理／不合理、内在／超越という二分法に囚われてしまうという難点があり、それを克服するために、実体論アプローチ、すなわち呪術の経験や実感に注目することを提案している。それは、呪術が合理的か否か、効果があるか否かは考えず、信じる人も信じない人もともに経験し感じる「そのもの」に向き合うアプローチとされる。次に呪術から対象地域に目を転じ、フィリピンのカトリシズムとシンクレティズムに関する先行研究がレビューされ、フォーク・カトリシズムが批判的に検討されている。

第1部は「恐れる」と題され、4つの章で、アスワンと呼ばれる超自然的（妖怪的）な存在を巡る議論が行われる。まず、従来のアスワン研究（民間伝承、民間信仰、比較宗教学研究）には西洋的キリスト教的な偏りがあることを批判し、人々のよりリアルなアスワン経験談を分析する必要性を説く。その上で、調査地カピス州をマスメディアがアスワンの故郷と表象しがちなことに対するカピス州住民の反発の複雑さが描かれ、また、妖術師アスワンと噂される実在する人物についての観察や様々な周辺人物への聞き取りに基づき、妖術師の社会的排除と包摂が、ともにアスワン知識を前提に行われていることが指摘され

る。

ここでアスワン論についてコメントすると、著者は第3章でまず、アスワンについての語りを「一般論」と「経験談」に分け、アスワン信仰・伝承を神学でなく民俗慣行や生活世界の地平から描くには、先行研究で使われがちであった前者の「キリスト教的世界観の中で」「脱文脈化され」「ディテールに乏しく現実味が薄い」一般論から、後者の「実際の生活の文脈の中で起こった実体験」の「よりリアル」な経験談に重点を移す必要があるとする(112-3頁)。この資料の絞り込みの結果として、第5章と第6章では、著者が採取した経験談に登場する、実在人物としての妖術師アスワンのみが取り上げられることになる。生活の文脈を重視する著者の姿勢に評者としては基本的には賛成だが、それで多様なアスワン像や経験のいくつかが切り捨てられてしまうとすれば、残念である。というのも、著者も第3部で引用している周辺地域の民族誌(Cannell 1999)においては、葬儀の最中に呪医(霊媒)からアスワン(死者の内蔵を吸う怪物)の出現をほのめかされた参集者たちが、自分の目で確認したわけでないのにリアルに反応する様子が観察され記述されているからである。つまり、人々がアスワン像を(誰かが変身したのか否かも含め)詳細に描けなくとも、リアルに体験することはありうるものであり、そうした例を排除せぬかたちで議論が整理されていればなおよかつただろう。

とは言え、第5章と第6章は、アスワン研究としてではなく、妖術の事例研究として見れば、記述が詳細で、議論に説得力があった。アスワンと呼ばれないものも含めると、妖術師の存在はフィリピン各地で報告されており、評者も北部フィリピンの山地少数民族の調査で妖術師の話聞いたことがある。排除と包摂の妖術現象を社会関係のなかで具体的に確認するという研究方法は他地域でも応用可能であり、対象社会の理解を深めるのに役立つと思われる。

第2部は「救われる」と題され、調査地のカトリック信徒の信仰実践を概説し、それが大部分で名目化していることへの非カトリックによる批判を述べた後、一部の熱心なカトリック信徒による積極的な実践の例としてカリスマ刷新運動の団体 *Divine Mercy* を詳しく紹介している。教会公認のこの団体は、集会行事として、聖霊による癒しのほか、教会が異端として否定する「憑依による啓示」をも行う。団体の信徒はこの矛盾を知りつつも、自らの敬虔さを抛り所にして、権威による正統/異端の二分法を乗り越えている、と著者は論じている。

ここでは、カトリックの信仰実践が一様ではないことや、信仰をめぐる様々な見解が、見事に立体的に整理され論じられていたと思う。ただ、本筋からはややずれるが、宗教組織の紹介の仕方が少し気になった。著者によると、宗教組織は、教会の監督・指導のもと、慈善・信心・伝道の3活動を行い、信徒の再教育の役割を担う組織で、メンバーは熱心な信徒と評価される。そして宗教組織は教会活動の補助を行うものと信仰実践中心のものに大別される(222-225)。司祭の監督・指導が形骸化していたり、活動内容に偏りがあることが指摘されてはいるが(224)、基本的には教会の公式見解に沿って紹介されている。だが、著者が信仰実践型としてまとめた宗教組織のなかには、募金や寄付を行う名士(夫人)の会という性格が強いものや、地域(近隣)の信徒の組織化の役割を果たすものなども含まれている(cf. Pertierra 1988)。これらの組織の会員は、必ずしも熱心な信徒ばかりではなく、なかには社会的地位の向上などの世俗的な目的をもって参加する者もいると思われる。

る。それでも、これらの組織が宗教組織であり続けるのは、教会がこれらの組織を、世俗的な利用価値があると見なしたり、軽視できないと判断することも一因であろう。一方、名実とも信仰実践に重きを置く信徒の組織であっても、Divine Mercyのように宗教組織として教会に認められるとは限らず、El Shaddaiのように宗教組織として公認されないものもある(240)。宗教組織に加わらない一般信徒の信仰実践については、その名目化や世俗化を第7章で論じているのだから、宗教組織の紹介でも、もう少しその世俗面や、第2部で問われている教会との実際の関係がうまく読者に伝わるように書いてほしかった。

第3部の題は「治る」である。まずは26人に及ぶ呪医メディコの諸儀礼や生業のあり方についての豊富な具体的データが示される。その示し方は、特定の妖術師や団体に焦点を当てた第1部・第2部とは異なり、諸事例は種類別に分類される。その上で、意外にも呪医は近代化以降、増加傾向にあることが指摘される。一般に、呪医は教会からは異端とされ、近代医療からは偽医者と見なされるが、個々の呪医は前者に対して自らの敬虔さを、後者には自らの正統性(医療関係者の公的資格等)を強調、つまり相手との親密性を強調することで、相手からの抑圧を回避している、と論じている。次に病者の側に視点を移し、病者たちが近代医療、カリスマ運動、呪医という異なる医療資源を横断的に利用する様を記述し、横断の利用を可能にする条件として、病の意味の過剰(解釈の複数性、開放性)を指摘している。また医療資源間には葛藤、抑圧、支配関係があるが、苦しみからの解放を願う病者は、まさにそうした関係ゆえに、医療資源間を渡り歩くのだと論じている。

なお、データ収集の困難を承知で言うのだが、第3部の13章『異端』か『偽医者』か?』では、医師の呪医観(一般論)と比べて、特定の医師と特定の呪医の具体的なやりとりや相互関係の例(経験談)の情報量が少ないように感じられた。もう少し多ければ、議論の説得力が高まったであろうが、やむを得ないとも思う。

本書最後の結論では、調査地の呪術的实践はすべて合理的で世界内在的な実存的条件を前提としており、まさにその条件との関連で、非合理で超越的な呪術が成立していたと述べ、呪術の実感や経験(実体性)こそが、合理/不合理や内在/超越という本来両立せぬものが結びつくことを可能にする、と論じている。呪術をこのように捉えるアプローチが呪術の実体論ということであろう。

評者は呪術論や著者が引用する哲学者たちの議論に詳しくはないので、本書で主張される呪術の実体論の是非を軽々に判断することは控えたい。ただ、一般理論を目指すのであれば、今後、他地域の異なる状況下での呪術によって適用範囲や有効性の検証等が行われることが期待される。

参考文献

Cannell, Fenella

1998 *Power and Intimacy in the Christian Philippines*, Cambridge: Cambridge University Press.

Pertierra, Raul

1988 *Religion, Politics, and Rationality in a Philippine Community*, Quezon City: Ateneo de Manila University Press.